
無様な最期

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無様な最期

【Nコード】

N5049I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

文化人田中信彦は常に祖国日本を貶め己を高みに置いて悦に耽っていた。その彼にある女性が論戦を挑んだ。これが田中の転落のはじまりであった。最近減りましたがこんな文化人が多いのも戦後日本の病でしょうか。

第一章

無様な最期

これが口癖だった。

「日本はだから駄目なんだよ」

「平和ボケだ平和ボケ」

「弱い者に強く強い者に弱い」

何かあると日本をけなしていた。それは批判ではなく罵倒であった。本人はそれを否定するが明らかに罵倒であった。罵っていたのである。

彼の名前は田中信彦。禿げ上がった頭にサングラスをしている。容姿はお世辞にもいいとは言えない。職業は一応はジャーナリストとなっている。

テレビに出では常に日本を叩きそうして他の国を持ち上げる。とにかく何かというと日本を罵倒することでも有名であった。そうした男であった。

しかし若者には人気があった。彼の書いた本はどれも売れた。

「そうだよな。だから駄目なんだよな」

「ああ、日本はな」

やはり祖国が気にならない者はいない。それで彼の言葉は問題提起となった。それで誰もがその言葉を聞くのであった。そして彼の文章や言葉には一つの魔力があった。

穏やかな言葉より過激な言葉の方が人の耳に入る。小声より大声の方が耳に入ると同じである。だからこそ彼は若者に人気があるのだった。

「アメリカではね、こうなんだよ」

「中国なんか凄いよ」

「イギリスの高潔さときたら」

あれやこれやと外国を出して日本を貶めている。しかし若者達は

それを憂国の言葉だと感じ取っていた。そうして彼の本を買いその出演している番組を観る。そうして金を手に入れた田中が何処に行くかという。それは銀座であった。

銀座の店に入ってそうして豪遊するのが常だった。トンベリをキープしてそのうえでホステス達を周りにはべらし大笑いするのであった。

「ははは、そうなんだよ」

豪奢な店の中でホステス達に対して言う。

「あいつ等馬鹿なんだよ」

「馬鹿なんですか」

「そうだよ、馬鹿だよ」

トンベリが入ったグラスを片手にホステス達を見回しながらの言葉であった。

「若い奴等はどいつもこいつも馬鹿なんだよ」

「そうなんですか」

「そうだよ。日本人全員馬鹿だよ」

明らかに日本人を愚弄している言葉であった。

「だからこの俺が啓蒙してやっってるんだよ」

言いながらホステスの胸をまさぐっている。

「この俺がな」

「それで先生」

「おうよ」

傲慢かつ尊大にホステスの一人に応える。

「今度の新刊ですけれど」

「ああ、楽しみにしてるよ」

偉そうに応えるのだった。

「また書いてやるからよ。凄いのをな」

「期待していますね」

そんな話をしながら彼は銀座で豪遊していた。それはいつものことであった。そうして彼は今日も遊ぶ。そうして本やテレビでは日

本を批判すると称して罵倒を続けていた。しかしその彼に対してある女性が不快感を持つのだった。

「この田中って人だけれど」

「はい」

もう初老と言ってもいいが気品のある顔立ちでとても美しい。穏やかな笑みだがそこには強さも見られる。白いスーツを端整に着こなしている。そのスーツは田中のドブネズミ色の下品な、値段だけは張っているそのスーツとは全く違うものであった。

「何なのかしらね」

「所謂ジャーナリストですが」

「そう。ジャーナリストなの」

彼女はそれを聞いてまずは頷くのだった。

「わかったわ。それはね」

「そうですか」

「ただしね」

ここでその目が光るのだった。

「納得はできないわね」

「といたしますと？」

「この人の言っていることがよ」

そしてこう言うのであった。

「全く正しくはないわ」

「全くですか」

「そうよ。全くね」

見ればその目にはつきりとした怒りと敵意があった。

「自分の国をそこまで嫌って何になるのかしら」

「それが受けてるんですよ」

さつきから側にいる彼女のマネージャーがそれに答える。二人は今彼女の質素で簡潔な事務所において仕事をしているのである。その時にテレビを観ているのだ。

第二章

「若い人に」

「まだ若い人達を煽ってお金を儲けているのね」

彼女は田中の正体をすぐに見抜いた。

「つまりは」

「そうなりますか」

「なるわ。自分の国を貶めてお金儲けをする」

少なくとも品のいいことではない。誰かを貶めてそれにより利益を得るといふ行為そのものが卑しいものであり許し難いものであることは言うまでもない。そしてそれが自分のいる場所や国家に対して、そして自分以外のその構成員に対してそうするのはさらに卑しい。

「とんでもない男ね」

「ではどうされるんですか？」

「論戦よ」

一言であつた。

「論戦を試してみたいわ」

「この人とですか」

「そうよ。そして勝ってみせて世の中に知らしめるわ」

これが彼女の決意であつた。

「この人の間違いをね」

「じゃあ今度番組で共演しますか？」

マネージャーはあらためて彼女に対して言ってきた。

「宜しければ調整しますけれど」

「ええ。御願ひするわ」

そして彼女もマネージャーのその言葉を受けた。

「それでね」

「わかりました。それじゃあ」

こうして彼女と田中の番組での共演が実現した。だが田中はそれを聞いても別にこれと行って何とも思っていないのであった。

「ええと。櫻井美紀子？」

「知りませんか？」

「一応知ってるさ」

彼は自分のマネージャーに対して横柄に答えた。今彼等は自分達の事務所にいる。何かゴテゴテと下品な装飾で満ちている。金やら紫やらそういったもので一杯であり万年筆までとびきり上等なものであった。

彼はその中でマネージャーの話聞いて。そのうえで答えたのである。

「名前はな」

「そうですね」

「あれだ。保守ババアだ」

また下品な感じで言うのであった。

「南京大虐殺や従軍慰安婦がなかったとかそんなことを言っているババアだよ」

「それは事実じゃないんですか？」

「事実なんてどうでもいいんだよ」

田中は傲慢に葉巻を吸いながら言い切った。

「事実なんてな。いつも言ってるだろ？」

「問題はそれが金になるかどうかですか」

「そうだよ。それだよ」

それこそが重要だというのである。

「いいか。世の中は馬鹿が多いんだよ」

「はい」

自分はそう思っていない、考えていない人間の言葉であった。

「その馬鹿はな。過激な言葉に弱いんだよ」

「あれですよね」

ここでマネージャーも応えて言う。

「馬鹿は嘘に騙され易い」

「ああ、それだよ」

「そして馬鹿を騙すには大袈裟な嘘がよりいいんですよ」

「その通りだよ。騙される奴が悪いんだよ」

彼は葉巻の煙を口から吐きながら述べた。

「結局な。俺は何も悪いことはしてねえぜ」

「それどころか世の中を啓蒙してますよね」

「そうだよ」

またしても傲慢に言い切る田中であつた。

「その通りだよ。外国のいい部分を教えてやってな」

「それに引き換え日本や日本人はこうだと」

「そうだよ。事実を言つてはいるぜ」

ただしその国の悪い部分と日本のいい部分は一切言わない。見てはいてもあえて隠してそのうえで若者に吹聴しているのだ。完全なダブルスタンダードである。

第三章

「半分だけはな」

「全て真実ではないですけどね」

「二割程度は絶対に本当のこと入れてるだろうが」

つまり確信犯の虚言家ということだった。

「違うか？それは」

「そうですね。それで先生」

「ああ。何だ？」

「この討論の申し出受けますか？」

「叩き潰してやるさ」

自信に満ちた言葉であった。

「ババア一匹。何だっつんだ」

「そうですね。それじゃあ」

「おう。あとな」

仕事の話の後でさらに言う田中であった。

「今日の夜だけけれどな」

「銀座ですか？」

「いや、デリヘルだ」

風俗だというのである。

「女世話しろ。いいな」

「家には帰らないんですか」

「かかあのところに？馬鹿言えよ」

家族をせせら笑いさえる。

「そんなところに戻って何しろっつんだよ」

「じゃあ今日はそのままホテルですね」

「ロイヤルスイートでな。楽しくやるぜ」

そのロイヤルスイートには相応しくない下卑た顔での言葉であった。

「今日もな」

「わかりました。じゃあ手配しておきます」

「しておけ。それとな」

その言葉は続く。

「あいつに言っとけ。もつと書けつてな」

「はい。じゃあゴーストライターにも伝えておきます」

「やっつけよ。金は弾むからつてな」

「それではそれも」

こんな話をしたうえで櫻井との議論に挑むのであった。それは夜の九時からの政治番組であり視聴率の高い番組であった。二人はその番組で対峙したのであった。

まずは田中が口火を切る。櫻井は何も言わない。田中はいつものように外国のいい部分を言ってからそのうえで日本をこき下ろす。そうしてこう言うのであった。

「だからね。日本人はガキなんですよ。駄目なんですよ」

これで勝ったと思った。櫻井が何も反論してこないからである。

しかし櫻井は彼の話を聞き終えてから。悠然と笑ってこう言うのであった。

「お話になりませんねえ」

「お話にならない!?!」

「そうです。お話になりません」

余裕に満ちた笑みでの言葉であった。

「それでは」

「お話にならない!?!」

「貴方の仰っていることはです」

これが櫻井の反撃のはじまりであった。

「嘘ばかりではありませんか」

「嘘!?!」

「そうですよ」

落ち着きに満ちた顔での言葉であった。

「嘘ばかりですよ」

「私が何時嘘をついたんですか!？」

当然ながら田中は反論する。しかしその様子は何処か狼狽したものであった。

「一体何処が。嘘をついたんですか」

「まず慰安婦ですけれど」

櫻井が最初に言ったのはこのことであつた。

「あれは強制ではありませんよ」

「いえ、強制です」

田中はあくまで反論する。

「ちゃんと証拠もあるじゃないですか」

「証拠とはこれですか？」

こう言つてある記事を出してきた。それはとある大手新聞のある日の一面であつた。ここでそれを出してきたのである。

「この軍の関与を示すものですか」

「そうです、それです」

田中にはやりと笑つた。こいつは墓穴を掘つた、と見てそのうえで櫻井に対して圧倒的優位に立つたと確信したからである。しかしこれは主観でしかない。

第四章

「それです。軍が関与して強制したとありますよね」

「そうですか？これを見ると悪質な業者がいるから取り締められて書いてますよね」

櫻井はその記事を指し示しながら田中に述べた。

「ちゃんと。つまり軍が強制的に慰安婦を徴用したのではなく悪質な業者を取り締まらせたのですよ」

「うっ……」

「それに慰安婦狩りが行われたという地域ですが」

そのことについても語られる。

「そこに取材に行かれた方が語っておられましたね。そんな事実は聞かれなかったと」

「それは」

「そもそもです」

櫻井の容赦ない攻撃は続く。

「当時赤線等があつて娼婦という存在がいましたね」

そのうえでこの事実についても言及するのであつた。

「吉原のような。そうですね」

「それは」

「それなのにどうして慰安婦を狩り集める必要があつたのです？」

櫻井はそのことも指摘するのだつた。

「どうしてですか。娼婦から募集すればよかつたのに」

「何か必要があつたのでしょうか」

「ありませんね。何しろ慰安婦はかなりの高給が支払われましたか
ら」

今度はこのことを指摘した櫻井であつた。

「ですからそれもありますよ」

「まあ慰安婦は」

「強制ではありませんでした」

櫻井はここで断言してみせた。

「それは絶対に有り得ません」

「いや、それは女性の権利を踏み躪った」

「ではソーランドやデートクラブもですか？」

現代の風俗産業である。

「デリバリーヘルスも。貴方はそれを言われるのならそちらに対して抗議されてはどうでしょうか」

「しかし強制連行は」

話を摩り替える田中であつた。

「あれは事実です」

「つまり貴方が仰っていた慰安婦は貴方の嘘だつたと仰るのですね」
言葉の端を確かに取られた。

「その通りですね」

「うう・・・」

「そしてです」

櫻井は畳み掛けるように攻めてきた。

「その強制連行にしるです」

「何か問題でも？」

「強制連行という定義が成立するには一つの大前提が必要です」
ここを指摘するのであつた。

「その大前提とは日韓併合が無効であつたという前提です」

「無効ではありませんか」

「いえ、有効です」

このことも指摘する櫻井だつた。

「何故なら一国の宰相のサインもあります。そうしてそのうえで併合されています」

「しかし臨時政府が上海にできましたし」

「ああ、あれですね」

その上海の臨時政府と聞いて悠然とした笑みになつた櫻井であつ

た。

「あれはサンフランシスコ講和条約の際に連合国として認められませんでしたね」

「それは国連が」

「国連に認められませんでしたね」

また言葉の端を取られた田中であつた。

「そうですね」

「それは国連が不寛容で」

「認められませんでした。合法的な政権とは」

それに尽きるのだった。

「つまり日韓併合は有効だったのです」

「しかしあの条約は銃を突きつけられて無理矢理」

「当時はそれが普通でした」

ムキになる田中に対して櫻井はあくまで冷静さを保ち続けていた。

「そのようにして結ばれた条約が無効だと定められるのは第二次世界大戦後です。つまりそれを言えば事後立法になりますよ」

「しかし朝鮮の民衆を踏み躪った」

「法律は法律です」

感情論に訴えようとしますがそれも撥ね付けられた。

「それを否定すれば貴方は無法者になりますか」

「それは」

怯んだがそれでも櫻井の攻撃は続く。

「つまり当時の韓国は日本であり韓国人は日本人だったのです」

厳然たる事実が述べられた。

「ですから日本人を徴用したただけで強制連行とは成り立たないので
す」

「本人の意志にそぐわなくてもですか」

「当時は戦争中で誰もが徴用されていましたよ」

事実より強いものはない。まさにその通りであつた。

「そうですね」

「うう……」

「そもそもです」

櫻井の容赦ない攻撃は田中が言えなくなっても続いた。

第五章

「強制連行八四〇万人なぞ不可能です。現代でもそれを行うだけの輸送力を使うとなれば相当なものです」

「しかし実際に在日の人達は日本にいるじゃないですか」

「渡航していたり密航により日本に渡ったというデータがあります
が」

櫻井はまた何かを出してきた。それはパネルであった。そこに詳しいデータが棒グラフと線グラフで描かれていた。数字であった。決して嘘をつくことのない。

「これはどう説明されるのですか？」

「それはですね」

「ついでに申し上げておきますけれど」

今度は櫻井からの言葉であった。

「関東大震災ですが」

「日本人が朝鮮人を虐殺しました」

田中は苦しいながらもこのことを言うのだった。

「あまりにも醜い蛮行です」

「確かに悲劇でした」

櫻井もそれは認める。

「どの時代どの国でもあった」

「どの時代どの国でも!？」

「不安に苛まれた人々が暴発するのは往々にしてあるものです」

これが櫻井の指摘であった。

「残念なことに」

「ではこれは日本人の罪です」

「しかしそれはマスコミに煽られたのです」

また記事を出してきた。そこには確かに不逞鮮人が云々と書かれていた。

「これにより人々が暴徒化しましたがすぐに軍と警察が動いて朝鮮人を保護しましたね」

「そんなことある筈がありません」

「いえ、ある警察署の署長はです」

櫻井は田中の否定に対してさらに言ってきた。

「朝鮮人が井戸を投げ込んだというデマに対してです」

「日本人が馬鹿だからそんなデマを信じたんですよ」

「そのデマを流したのはこの新聞社ですが」

田中の反論めいたものも今しがた出したその記事で黙らせるのだ
つた。

「日本人のマスコミの一部が流したデマですね」

「うう……」

「それによりです」

櫻井の言葉は続く。

「朝鮮人の保護の為にその井戸の水を次から次に飲んでみせたので
すよ」

「パフォーマンスですね」

「そうではなく毒が入っていないことを確かめる為にです」

その為に飲んだのである。

「今で言うと何リットルも一度に。それによりデマは消えました」

「ですがそれにより日本人の罪が消えたわけではないでしょう？」

「はい、一部の人の暴動の罪は消えません」

田中がそれを日本人全体の罪だと拡大解釈するのを防いでいた。

「ですが警察や軍がそれを止めたということとはです」

「それは当然ことじゃないですか」

苦しい言い逃れであった。しかも彼は自分の今の発言がそれまでの自分の発言を否定したものであるということも気付いてはいなかった。

「それも」

「国家としてはそうしたことはしていない何よりも証ではありません

んが」

「なっ……」

その通りであった。言われてやっと気付いたことであった。

「これは。そうですね」

「それは」

「さて。それです」

櫻井の攻撃は続く。

「植民地統治といたしますが植民地統治を受けている立場の人間から中將が出るでしょうか」

言うまでもなく軍の最高幹部になる。閣下という尊称で呼ばれるだけではない。かつての日本軍では将官は天皇陛下が直々に任命されるという形式であった。実質的には軍のそうした人事を陛下が額かれるというものであったがそれでも陛下が御存知であられない筈がないのである。植民地の者がそこまでなることなぞ普通に考えて絶対に有り得ないことなのである。彼女はそれを言ったのだ。

第六章

そうした激しい攻撃が続き田中は一敗地に塗れた。これが彼の転落のはじまりであった。

彼はその後その嘘や捏造が次々に暴かれ書籍でもテレビでも批判が殺到した。ネットでも散々に叩かれ最早大嘘つきになっていた。当然本は売れなくなりテレビにも出られなくなった。そして次にはゴーストライターに書かせていたことも発覚したのであった。

「ふざけるな、そんなことまでやっていたのか！」

「もう生きるのを止める！」

ネットでは爆発的な批判となった。そうして田中に過去襲われたことがあると告発する女性や詐欺で騙されていた者達が次々に名乗り出て裁判になり実刑判決を受けた。裁判費用や慰謝料、賠償金といったもので彼は完全に破産し家も何もかもを失い家族も去り遂には。

「あの患者はどうだ？」

「相変わらずですね」

ある病院において。医師達が病院の廊下でこんな話をしていた。

「何も言えませんか動けません」

「そうか」

「何しろここが」

その医師は話をしながら右手の人差し指で自分のこめかみのところを指し示しながら話した。

「もう駄目になっていますから」

「脳神経がもうズタズタになっていたな」

「ええ。心労で遂に」

「自業自得だけれどな」

ここでこうした言葉も出て来た。

「それも」

「そうですね。けれど一生あのままですよ」
彼は言った。

「もう。ずっとね」

「そうか。本人にその自覚はあるかな」

「ないでしょうね」

「こども話された。」

「それはもう絶対に」

「そうか。やっぱりないか」

その時田中は病院の廊下で車椅子に座っていた。目は虚ろになっ
ていて何も見えはしていないかのようだった。口からはだらしなく
涎を垂らし呆けていた。

手も足も碌に動きはしない。右手が時折ピクリ、と動くだけにな
っていた。患者の服を着てそうして。そこに座っているだけであっ
た。

「ああ、その患者だけれど」

「はい」

その車椅子を引いている看護師に彼の後ろから声がかけられた。

「隔離病棟だったよね」

「はい、そうです」

「やっぱり何も話しはしないかい？」

声をかけた医師は看護師に対して問うた。

「あれ以外は」

「はい。時々何かを喚く以外は」

「そうか。やっぱりな」

「身寄りもいませんしずっとここにいるんですか」

「そうだよ。ずっとね」

医師はその車椅子に俯いて座っている田中を背中越しに見ながら
述べた。

「このままさ」

「そうですか。ここですつとですか」

「裁判の時に倒れてそうなるとはね」

田中は己の婦女暴行事件の時に被告人として発言しようとしたその時に倒れたのである。その時には既に神経的にかなりポロポロになつていた。それが遂に完全に切れたのである。

「無残なものだよ」

「ええ。本当に」

「じゃあ病棟に入れておいて」

医師はここまで話すと素っ気無く看護士に告げた。

「いつものようにね」

「わかりました。それじゃあ」

こうして田中は隔離病棟に連れて行かれた。そうしてその廊下で。

「うああああああああああっ!!!」

突如こう絶叫するのだった。しかしそれは病棟の廊下に空しく響いただけであつた。誰もそれを聞いても何とも思わなかつたのであつた。

無様な最期

完

2009・6・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049i/>

無様な最期

2010年10月8日15時13分発行